

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Penser la traduction : sur quelques erreurs de traduction dans "Le petit prince" traduit par NAITO Aro

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2006-06-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田中, 敏彦, Tanaka, Toshihiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/643

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



誤 訳 を 考 え る

——内藤濯訳『星の王子さま』の幾つかの誤訳について

田 中 敏 彦

1. はじめに

この作品はいままで151の言語に翻訳されて5,000万部（日本では600万部）が売れかつ毎年100万部が世界中で売れ続けていると言われる（1999年4月18日付け朝日新聞日曜版）。日本においても、原題の *Le Petit Prince* を「星の王子さま」という魅力的な題に訳し換えた内藤濯氏の翻訳で親しまれている。実際親しみやすさ読みやすさという点では内藤訳はすぐれていると思う。

しかし、筆者は十年以上も前から大学の教室でフランス語の講読の教材として原文と内藤日本語訳と英語訳を対照させて読む（これを「ロゼッタ・ストーン方式」と呼んでいる）機会があり、内藤訳には幾つかの重大な誤訳が存在することに気がついていった。かつて小林秀雄は自らのランボー詩集の翻訳について、「水の中に酸素があるごとく誤訳があるであろう」と述べたことがあるが、誤訳が混じっていることは当然であるとしても、少ないに越したことはあるまい。とりわけ毎年多くの人に読まれる『星の王子さま』のごとき名作については尚更である。以上のようなことを考えながらも文章化して発表しないうちに、内藤氏は世を去られ、日本では某書店が独占していた翻訳出版権の消滅にともない2005年から「新訳ラッシュ」と呼ばれるほど十数種もの新訳が相次いで出版されることになった。それらの新訳で内藤訳の

誤訳が訂正されているかどうか可能な限り調べてみると、誤訳がそのまま受け継がれていることも、改善されていることもあるようであるが、内藤訳はおそらく今でも最も多く読まれていると思われるので、内藤訳の検討は無駄ではあるまい。

さらに、誤訳には誤訳が生まれるだけの理由があり、その理由を考えることは、外国語を学習する上での興味深い練習問題を提供することになるはずである。

この小論では、王子様と狐の対話を内容とする第21章にしぼって内藤訳の問題点を検討することにしたい。この章は物語全体のなかできわめて重要な章であるにもかかわらず、内藤訳の誤訳が集中しているからである。

2.1. 星巡りの旅

問題点の検討に入る前に、この21章を理解するのに必要な文脈、つまりこの章が作品全体に占める位置について、簡単に述べておく必要がある。飛行機のパイロットである語り手の私はサハラ砂漠の真ん中に不時着して、王子に出会い、徐々に王子の過去を知ることになる。王子が住んでいた小さな惑星に咲いた高慢で気むずかしいバラの花と不和になった結果、王子はいわば家出をして星巡りの旅に出たのだった。《ぼくは若すぎてバラの花を愛することが出来なかった》(0/435) と王子自身が説明しているように、この作品は王子が成長してバラの花を愛しうようになる過程を描いたある種の Bildungsroman と見ることができると思われる。最初に訪ねた星は、《すべての人は家臣である》[0/439] と思っている王様の住んでいる星であり、二番目の星は、《すべての他人は（自分の）称讃者である》[0/444] と思いこんでいる自惚れ屋が住んでいた。三番目の星には、自分が酒飲みであるということを恥じながら、その恥を忘れるために酒を飲むというアル中の男が住んでいた。四番目の星に住んでいたのは星の数を数えるビジネスマン（原語でも businessman）であった。王子とビジネスマンの間で行われる「所有

すること posséder」に関する対話は21章の解釈にも関連があるのでここで引用しておく価値がある。

《——5億の星をどうするの？——5億162万2,731だ。私は真面目な人間だから、数字には几帳面なんだ。——その数えた星をどうするの？——どうするかだって？——そう。——どうもしないさ。所有するのさ。——星を所有するの？——そうとも。(……)——星を所有して何の役に立つの？——金持ちになるのに役立つのさ。——それで金持ちであることは何の役に立つの？——他の誰かが見つけた星を買うのに役立つのさ。(……) どうやって星を所有することができるの？——星はだれのものだい？とビジネスマンは不機嫌そうに言い返しました。——わからないけど、誰のものでもないと思う。——そうすると星は私のものさ、最初に私が星を所有することを思いついたのだから。》〔0/450〕

そのように所有した星々を繰り返し数えながら「星を管理・運営・経営する gérer」と言うビジネスマンに対して、王子は次のように述べる。《ぼくがマフラーを所有していたら首に巻いて持って行ける。ぼくが花を所有していたらぼくはその花を摘んで持って行ける。でも君は星を摘むことはできない。》〔0/450〕ビジネスマンの所有がいわば交換価値にしか関わらないのに対して、王子の所有は使用価値に関わると言ってもよい。しかし、いずれにせよ、ここで重要なのは王子が故郷の星に残してきたバラの花を「所有」のカテゴリーで考えているということである。《ぼくはひとつの花を所有していて毎日水をやっている。また三つの火山を所有していて毎週すす払いをしている。(……) ぼくが花や火山を所有していることは、花や火山にとって役に立つことなんだ。でも君は星々にとって役にたっていない。》〔0/451〕バラの花との「所有」関係は、後ほど述べるように、大きく動揺することになるだろう。

五番目の星には命令に従って一分ごとに街灯を点けたり消したりする点灯夫が、六番目の星には自らは一步も動かないで探検家の報告を書き留めるだ

けの地理学者が住んでいた。他人に命令しかしない王も、他人に褒められることにしか関心のない自惚れ屋も、自分のなかに閉じこもったアル中も、金儲けに没頭するビジネスマンも、忙しすぎる点灯夫も、自らは経験をしようとしてせずに経験の報告にだけ興味を持つ地理学者（これは学者に対する辛辣な批判だ）も、王子の友人になることはできそうもなかった。彼らはまとめて《大人 les grandes personnes》と呼ばれていて、逆に言うと彼らは大人の六種類の類型であると考えることができる。けれども、王子が点灯夫について《あの人はぼくの友人にすることができたかもしれない》[0/454]と述べていることは注目に値する。《あの人は他の人々、王や自惚れ屋や酒飲みやビジネスマンに軽蔑されるだろうけど、ぼくには滑稽に思われなただ一人の人だ。おそらくあの人が自分自身以外のことに関わっているからだろう。》[0/454]

2.2. 5,000本のバラ——「唯一つ」から「唯の一つ」へ

そして七番目の星が地球である。《地球は取るに足らない惑星ではありません。そこには、111人の王さま（……）、7,000人の地理学者、90万人のビジネスマン、750万人の酒飲み、そして3億1100万人の自惚れ屋が、つまり約20億人の大人がいるのです。》[0/460] この一節に出てくる数字は計算に合わないが、このことはおそらく次のことを示唆していると思われる。すなわち、ビジネスマンが《私は真面目な人間だから、数字には几帳面だ》と述べているように、《大人は数字が好き》[0/421]なのに対し、《でも、もちろん、人生がわかっている私たちは、数字なんかどうでもいいのです。》[0/422]と語り手が述べているごとく、「ここは計算に合わない」などと指摘するのは、「大人」の側の視点である、ということを、である。しかし、それよりも大事なことは、王子にとって唯一友人になれそうな「点灯夫」は電気が発明されてからは地球にはもはやいないということだ。したがって地球にやって来た王子が砂漠で出会うのは、子供の心を失っていない語り手

を別にすると、毒蛇や狐や群生するバラの花である。

王子は砂漠をさまよったあげく、ある庭園に咲き誇る多くのバラの花に出会い、それらがすべて、彼の故郷の星に咲いていたバラの花に似ていることを発見する。《そして王子は自分がとても不幸に感じた。王子のバラは、自分はその種類としては宇宙で唯一つ *seule* だと王子に語っていた。それなのに、ここには、一つの庭に、互いによく似た5,000もの花があるではないか！》〔0/466〕

この発見は王子にある種の精神的危機をもたらすものであった。《ぼくは唯一つの *unique* 花を持っているから豊かだと思っていた。それなのにぼくが所有しているのはありふれた *ordinaire* 一本のバラだけだ。このバラと、膝に届くほどの高さの三つの火山（……）では、ぼくはとても立派な王子 *un bien grand prince* にはなれない……》〔0/468〕そして王子は草の上につつぶして泣いたと記されている。これが狐が登場する第21章の直前の状況である。王子はある種の精神的危機を迎えている。だがそれはいかなる性質の危機なのだろうか。

その危機は、「唯一つ」のバラだと思っていたものが、実は多数ののなかのありふれた「唯の一つ」のバラに過ぎなかったという発見によって触発されたものである。しかし危機はバラの花自体ではなく、それを所有する王子自身の自己認識に関わっている。王子は宇宙で「唯一つ」のバラを所有する自分自身を「豊かで*riche*」、「立派な、または偉大な *grand*」な王子として自己認識していたのである。ところがそのバラはありふれたバラにしか過ぎなかった。ありふれたバラを所有しているにすぎない自分自身を、豊かでなく、立派でも偉大でもない、ありふれた存在として、まさしく「小さな *petit* 王子」として認識することを迫られたこと、自分自身の卑小さを思い知らされたこと、これが王子が経験している危機の内実であると考えられる。この精神的危機は、「唯一つ」の自己を中心とする立場から脱却し、多数の中の「唯の一つ」の自己の立場へと転換する際の危機、いわば自己意識の天動

説から地動説への転換の危機である。王子が出会った様々な「大人たち les grandes personnes」は、点灯夫を除くと、みな自分自身だけにかかずらう人々であった。そう批判していた王子自身ははたして自己中心性を完全に免れていただろうか？自分自身を「豊かで」「立派な」王子とする自己認識は、王子が「所有」するバラの「唯一性」に依存していたのであり、結局のところそのような自己認識は自己の「唯一性」という自己中心性にほかならないであろう。

第21章は、《狐が現れたのはその時だった。》〔0/468〕の一文で始まる。「その時」すなわち王子が危機を迎えて泣いている最中に、そこから脱出する秘密を教えるために、狐は出現したのである。その秘密とは、バラの花との関係を「所有」のカテゴリーから解放すること、そして同時に「唯一性」の観念の内容を変換すること、であった。

3.1. 語義の二重性

ここからは内藤濯訳を検討しながら第21章をつぶさに読んでいくことにしよう。この章の大半は「飼いならす *apprivoiser*」とは何かをめぐる狐と王子の対話である。王子が泣いているところに狐が現れ、王子の《ぼくと遊ばない？ぼくととても悲しいから……》という呼びかけに、狐は《おれはあんたと遊べない。おれは飼いならされていないから。》と応じる。そして以下のようなやり取りが続く。

《「〈飼いならす〉って、それ、なんのことだい？」「あんた、この人じゃないな。いったい、なにさがしてるのかい？」「人間さがしてるんだよ。

〈飼いならす〉って、それ、なんのことだい？」「人間ってやつあ、鉄砲もってて、狩をするんだから、おれたち、まったく手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間ってやつにあ、趣味がないときてるんだ。あんた、ニワトリさがしてるのかい？』》〔2/90〕

ここで問題になるのは、《ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、

人間ってやつにあ、趣味がないときてるんだ。》という狐のせりふである。「ニワトリを飼うことが人間たちの唯一の趣味」というのは、考えてみると奇妙ではあるまいか。原文を引用して検討してみよう。

《Les hommes, dit le renard, ils ont des fusils et ils chassent.

C'est bien gênant !

Ils élèvent aussi des poules. C'est leur seul intérêt.》〔0/469〕

原文は leur seul intérêt であり、intérêt を内藤訳は「趣味」と解しているわけだ。英語の interest も同様であるが、フランス語の intérêt には、大別して、興味・関心・趣味という系列と、利益・利点・得という系列の二つの意義を区別する事が出来る。利子・利息という経済的意義は後者の系列に属している。稲垣直樹氏はこの語義の二重性を次のように指摘している。

《C'est leur seul intérêt. において intérêt の意味をまず、「メリット」と考えた場合、「ニワトリを飼っていることが自分（つまりキツネ）にとって、人間たちの唯一のメリットだ」という意味になります。また、「興味、関心」と考えた場合、「ニワトリを飼うことが人間たちの唯一の関心事だ」という意味になります。》〔9(5月号)/88〕

ただ、この書き方だと両方の解釈が同じように成立することが示唆されているように思われるが、はたしてそうであろうか。内藤訳以外の翻訳を検討してみると、以下のように、3) Richard Howard訳、5) 池沢夏樹訳、7) 河野万里子訳のみが、intérêt=利点説であり、それ以外はすべて内藤説と同じである。

1) "Men," said the fox, "They have guns, and they hunt. It is very disturbing.

They also raise chickens. These are their only interests. 〔1/80〕

3) "People," said the fox, "have guns and they hunt. It's quite troublesome.

And they also raise chickens. That's the only interesting thing

about them. [3/58]

- 4) "사람들은 총을 가지고 있어. 그 총으로 사냥을 하지. 그래서 아주 거북해!

그들은 닭도 키우는데 그게 유일한 낙이야." [4/152] 【人々は銃を持っている。その銃で狩をする。それでとても困っているよ。彼らはニワトリも飼っているが、それが唯一の楽しみさ。】

- 5) 「人間か」とキツネは言った。「銃を持っているし、狩をする。それが困ったところでね! でも、ニワトリを飼ってる。ありがたいのはこっちの方だね。」 [5/96]

- 6) 「人間はね、獵銃をもって、狩をする。まったく、困ったことさ! 連中、ニワトリも飼っている。そんなことにしか興味がないんだ。」 [6/110]

- 7) 「人間たちって」とキツネ。「銃を持っでて狩をするんだ。いやだね! ニワトリも飼ってる。いいのはそれだけ。」 [7/99]

- 8) 「人間たちか」と狐が言いました。「彼らは鉄砲を持っでいて、狩をするだろう。あれはまったく困りものだよ。雌鶏も飼ってる。それが唯一の関心事ときてる。」 [8/105]

- 10) 「人間は鉄砲を持っでいて、狩をするんだ。まったく困ったもんだ。鶏も飼っている。人間はそんなことしか興味がないんだ。」 [10/104]

文法的観点から見ると、所有形容詞は動作性をもった名詞に対して主格にも目的格にもなれるという二重性をもっていることが、こうした解釈の二重性を生む原因である。たとえば、「私は彼らの到着を待っている。J'attends leur arrivée.」において、所有形容詞 leur は名詞 arrivée の孕む動詞 arriver の主格であるけれども、「私は彼らの手助けに行く。Je vais à leur aide.」において、leur は名詞 aide の孕む動詞 aider の目的格であり、主格は「私」なのである〔プチ・ロワイヤル仏和辞典(小学館・1996)・906頁〕。したがって、leur seul interet の場合、「彼ら」を主格ととるならば、彼らが興味・関心をもつ、と解するのが自然である。内藤訳はこの解釈を採用しているわ

けだ。一方「彼ら」を目的格ととれば、彼らは関心・興味の対象であり、この場合、関心・興味の主格には狐を想定しなければならない。狐が唯一人間に対して関心・興味を持つのは、ニワトリを飼っていることだ、ということである。それは見方を変えれば、彼らは狐が関心・興味を持つに足る利点・利益を持っているということになる（ここに *intérêt* の二重の意義の関係が示されている）。日本語訳としては「人間たちは銃を持っていて狩をする。それは困ったことさ！彼らはまたニワトリを飼っている。それが彼らの唯一の取り柄さ。」と訳せばよいだろう。

しかしこの二つの解釈はどちらがよりよい解釈であろうか。「ニワトリを飼うことが人間たちの唯一の趣味だ」というのは、常識的に考えて奇妙であるから、*intérêt* = 利点説に軍配をあげるべきであろうか。複数の意義の間で迷うときは、文脈に立ち返って、常識さえも一応括弧に入れて、文脈すなわち意味の流れをつかまなくてはならない。

《(A) Les hommes, (...), ils ont des fusils et ils chassent.

(B) C'est bien gênant !

(C) Ils élèvent aussi des poules.

(D) C'est leur seul intérêt.》[0/469]

「(A) 人間たちは銃を持っていて狩をする。

(B) それは困ったことさ！

(C) 彼らはまたニワトリを飼っている。

(D) それが彼らの唯一のXさ。」

すこし注意してみると、(A)と(B)、(C)と(D)が、セットになり、かつ(A)と(C)、(B)と(D)が対応しており、 $(A):(B) = (C):(D)$ というある種の比例式が成立していることがわかる。(A)「人間たちが銃で狩をすること」は(B)狐にとって「困ったこと」であるが、(C)「人間たちがニワトリを飼っていること」は(D)である。この(D)が未知数Xである。(C)は(A)とは反対に狐にとって都合のいいことを意味

しているから、未知数Xは「困ったこと」の反対の、狐にとっての何らかのプラスの価値を意味していることが推測されるであろう。したがってXである *intérêt* は利点・利益の意義であると結論することができる。

また少し先で出てくる狐と王子の次のようなやり取りも *intérêt* の意義を解釈するヒントを与えてくれる。王子が地球以外の星から来たことに気がついた狐は次のように訊ねた。

《—— Il y a des chasseurs, sur cette planète-là ? —— Non. —— Ça, c'est intéressant! Et des poules? —— Non. —— Rien n'est parfait, soupira le renard.》 [0/470] (下線部引用者)

《—— その星には獵師はいるかい? —— いや。—— そいつは、都合がいいや。それでニワトリはいるのかい? —— いや。—— 何もかも完璧ってわけにはいかないな、と狐はため息をつきました。》

ここには先ほどと類似の比例式を見出すことができる。「王子の星に獵師がいないこと」はNot(A)であるから、Not(B)すなわち「困ったこと」の否定＝「Ça, c'est intéressantそいつは、都合がいいや」ということになる。これでもし「王子の星にニワトリがいる」＝(C)であるなら、「何もかも完璧」＝(D)ということになるはずである。重要なのは、下線部の形容詞 *intéressant* が、さきほどの名詞 *intérêt* とほぼ同じ意義で用いられていることである。

両義的または多義的な語義を適切に解釈して翻訳するには、文脈把握が必要不可欠である。意味の流れとしての文脈を把握するという場合、文脈は、問題の箇所直前直後だけでなく（これが最も重要ではあるけれども）、その前後をできるだけ広く視野に収めなければならない（これはかなり難しいことであるが）。

3.2. 鍵になる表現——「唯の一つ」から「唯一つ」へ

さて狐はようやく「*apprivoiser* 飼いならす」の意味を説明し始める。内

藤訳で引用しよう。

《「(……) あんたニワトリをさがしてるのかい?」「ちがう、友だちさがしてるんだよ。〈飼いならす〉って、それ、なんのことだい?」「よく忘れられてることだがね。〈仲よくなる〉っていうことさ」「仲よくなる?」「うん、そうだとも。おれの中から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ【ママ】、ほかの十万もの男の子と、べつに変わりのない男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくなたっていいんだ。あんたもやっぱり、おれがいなくなたっていいんだ。あんたの中から見ると、おれは、十万もの狐とおんなじなんだ。だけど、あんたがおれを飼いならすと、おれたちは、もうたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとってこの世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ……」とキツネがいました。「なんだか、話がわかりかけたようだね」と王子さまがいました。「花がひとつあてね……。その花がほくになついていたようだけど……」》〔2/90〕(下線部引用者)

「apprivoiser飼いならす」を狐は「creer des liens つながりをつくる」と説明しているのだが、内藤訳は下線部のように〈仲よくなる〉と訳している。ここでは狐と王子が友だちになるという文脈なので、〈仲よくなる〉でなんら問題はないように見える。だが、「飼いならす」が「つながりをつくる」ことだというのは、きわめて重要な、鍵になる表現であり、鍵になる表現は直訳するのが原則である。後に見るように、この原則を守らなかったために、内藤訳は重大な誤訳に導かれてしまうのである。さすがに内藤訳以外に「つながりをつくる」を直訳しなかった例はないようである。

同じ問題点は引用文の最後の箇所「花がひとつあってね……。その花がほくになついていたようだけど……」についても指摘することができる。内藤訳で「なつく」となっている箇所は、「apprivoiser 飼いならす」である。「なつく」と「飼いならす」は意味が通じるところがあるので、日本語読者でもこの「なつく」が「飼いならす」と同じ意味であると推測することは可

能かもしれないが、「飼いならす」と「なつく」はどう違うのかと余計なことを考える余地を残す必要がどこにあるのだろうか。そもそもここは、「unique 唯一（ただひとつ）」のものと思っていたバラの花と自分自身が、ありふれたふつうのもの、すなわち多くのなかの「唯の一つ」であることに気がついて落ち込んでいる王子が、《un petit garçon tout semblable à cent mille petits garçons ほかの十万もの男の子とまったくよく似た男の子》〔0/470〕または《un renard semblable a cent mille renards ほかの十万もの狐とよく似たキツネ》〔0/470〕が、「飼いならす＝つながりをつくることによって」、《Tu seras pour moi unique au monde. Je serai pour toi unique au monde. きみはおれにとって世界で唯一の存在になり、おれはきみにとって世界で唯一の存在になるだろう》〔0/470〕というキツネの教えを聞いて、精神的危機を転機に転じる大事な場面である。王子は世界に「unique 唯一つ」と思っていたバラの花、そしてそれを「所有」する自分自身が、ほかの多くのものとよく似た「唯の一つ」の存在でしかないことに気がついて落胆していたのであった。ところが狐の話を聞いて、王子は、バラの花が彼をすでに「飼いなら」していたことに、したがってやはりバラの花は世界で「唯一つ」の存在であることに、気がつき始めたのである。しかしありふれた「唯の一つ」をふたたび「唯一つ」にするとはどういうことだろうか。

キツネであれ、王子であれ、バラの花であれ、それぞれを独立した個体とみなすならば、多くのなかの「唯の一つ」の個体にしか過ぎないであろう。しかし個体中心的な、あるいは自己中心的な見方を脱却して、個体と個体をむすぶ関係すなわちつながりの観点から物事を見れば、つながりで結ばれた個体同士はそれぞれにとってかけがえのない「唯一（ただひとつ）」の個体となるはずである。個体から関係へと観点が転換することによって、「唯一性」の観念の内容が変容するのである。それだけではない。ある個体が他の個体を「所有」する関係は個体中心の観点から成り立つものであって、関係＝

つながりを優先する観点からは「所有」は成り立たないのではないだろうか。しかしこの問題は後ほど検討しよう。

3.3. 「もの」と「こと」

狐は「飼いならす＝つながりをつくる」ことが何を意味するかを、具体例、すなわち足音の例（つまり聴覚の例）と色の例（つまり視覚の例）を持ち出して説明する。内藤訳を引用して問題点を検証してみよう。

《(……) もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、(……) 足音だって、きょうまできいてきたのとは、ちがったのがきけるんだ。ほかの足音があると、おれは、穴のなかにすっこんでしまう。でも、あんたの足音があると、おれは音楽でもきいてる気もちになって、穴の外へはいだすだろうね。それから、あれ、見なさい。あの向こうに見える麦ばたけはどうだね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんて、なんにもなりゃしない。だから麦ばたけなんか見たところで、思い出すことって、なんにもありゃしないよ。それどころか、おれはあれを見ると、気がふさぐんだ。だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにゃ、そいつが、すばらしいものにみえるだろう。金色の麦をみると、あんたを思い出さだろうな。それに、麦を吹く風の音も、おれにゃ、うれしいだろうな… …》〔2/92〕

まず下線部の「仲よく」するは、原文では「飼いならす *apprivoiser*」であって、「つながりをつくる *créer des liens*」ではないのだけれど、*apprivoiser*=*créer des liens* であるから、*créer des liens* を「仲よくする」と訳し、さらに *apprivoiser* にも「仲よくする」という訳語をあてることは誤訳であるとは言えない。しかし、「飼いならす」というのは、今西錦司によると《動物の方でも人間に帰属したことを認め、人間の方でも帰属してきたことを認めたいうえでなりたった、一種の共棲関係で》〔今西錦司全集第二卷（講談社・1974）・418頁〕あるそうだから、含蓄のある言葉であり、かつ

鍵になる言葉であるから、直訳の方が望ましいことは確かである。

内藤訳で問題なのは、波線で示した「あれ」と「そいつ」が何を指すのかということである。日本語の訳文を読む限りでは、「あれ」は「麦ばたけ」を、「そいつ」は「あんたの金色の髪」を指すようである。しかしフランス語原文は次の通りである。

《Les champs de blé ne me rapellent rien. Ca, c'est triste! Mais tu as des cheveux couleur d'or. Alors ce sera merveilleux quand tu m'auras apprivoisé! Le blé, qui est doré, me fera souvenir de toi.》
[0/471]

波線部は、それぞれ《麦ばたけはおれになにも思い出させない。それは悲しいことさ!》と《あんたがおれを飼いならしてくれるなら、それはすばらしいことになるだろう!》と訳すことが出来る。「それ Ca, c'」または「それ ce」という指示代名詞は、通常は名詞が指し示す「もの」を指すのではなく、文の内容のような「こと」を指すのであり、ここではそれぞれ、前文の内容である「麦ばたけはおれに何も思い出させないこと」と「あんたが金色の髪をしていること」を指している。内藤訳は「こと」を「もの」として翻訳する傾向をもっているようである。点線部「tu as des cheveux couleur d'or あんたは金色の髪をしている」を内藤訳が「あんたのその金色の髪は美しいなあ」と訳しているのも、「こと」の「もの」化と無関係ではあるまい。重要なのは、王子の髪の毛が金色をしている「こと」から、王子が狐を飼いならすならば、金色の麦ばたけを見て王子を思い出す「こと」になり、つながりのなかった狐と麦ばたけの間につながりができる「こと」であって、金色の髪の美しさという「もの」の性質ではないからである。

つながりは、このように、人や動物だけでなく、麦ばたけのようなものへも延長して行く。引用の最後の一文《それに、麦を吹く風の音も、おれにゃ、うれしいだろうな……》は、麦ばたけからさらに麦ばたけを吹き渡る風へもつながりが延長されていくことを暗示している。

3.4. 愛と所有

内藤訳で続きを引用し、原文と拙訳も併せて掲げよう。

《キツネはだまって、長いこと、王子さまの顔をじっと見ていました。「なんなら……おれと仲よくしておくれよ」とキツネがいました。「ぼく、とても仲よくなりたんだよ。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。友だちもみつけなけりゃならないし、それに、知らなけりゃならないことが、たくさんあるんでねえ」「じぶんのものにしてしまったことでなけりゃ、なんにもわかりゃしないよ。(……)」》〔2/94〕

《—— S'il te plaît... apprivoise-moi !dit-il.—— Je veux bien, répondit le petit prince, mais je n'ai pas beaucoup de temps. J'ai des amis à découvrir et beaucoup de choses à connaître. —— On ne connaît que les choses que l'on apprivoise, dit le renard.》〔0/471〕

《——お願いだ……おれを飼いならしてくれよ。——そうしたいけど、あまり時間がないんだ。友だちをみつけなくてはならないし、多くのことを知らなくてはいけないんだ、と王子は言いました。——知ることができるのはただ飼いならしたものだけだよ、と狐は言いました。》

内藤訳の問題点のうちもっとも重大なのは、「On ne connaît que les choses que l'on apprivoise 知ることができるのはただ飼いならしたものだけだよ」の箇所を「じぶんのものにしてしまったことでなけりゃ、なんにもわかりゃしないよ。」と訳していることである。「Les choses 物事・事物」が目的語になっている以上（実際、麦ばたけや風まで「飼いならす＝つながりをつくる」ことは及ぶのである）、「仲よくする」という訳語をここで使うことはためられたことは推測に難くない（「事物と仲よくする」という表現は日本語としては奇妙だから）。しかし、apprivoiser に「自分のものにする」という訳をあてる発想はいったいどこから生まれたのか。「自分のものにする」は s'approprier であるから、apprivoiser と似ていなくもないが、両者の混同はまず考えられないだろう。

私見では、同じ第21章の次の箇所を踏まえて内藤氏は、*apprivoiser* というのは結局のところ「自分のものにする」ことであると確信されたのではないかと思う。狐を「飼いならした」王子は、狐から、《バラの花たちをもう一度見に行ってごらん。そうすれば君のバラが世界で唯一つであることがわかるだろう。》〔0/474〕と勧められて、群生する何千ものバラの花のところに出かけていき、バラたちに向かって王子が話しかける、というよりは、王子が独り言を述べる場面である。内藤訳で引用する。

《「あんたたち、ぼくのバラの花とは、まるっきりちがうよ。それじゃ、ただ咲いてるだけじゃないか。だあれも、あんたたちとは仲よくしなかったし、あんたちのほうもでも、だれとも仲よくしなかったんだからね。ぼくがはじめて出くわした時分のキツネとおんなじさ。あのキツネは、はじめ、十万ものキツメとおんなじだった。だけど、いまじゃ、もう、ぼくの友だちになっているんだから、この世に一匹しかいないキツネなんだよ。(……) あんたたちは美しいけど、ただ咲いているだけなんだね。あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ。もちろん、ぼくのバラの花も、なんでもなく、そばを通っていく人が見たら、あんたたちとおんなじ花だと思うかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくには、あんたちみんなよりも、たいせつなんだ。だって、ぼくが水をかけた花なんだからね。覆いガラスもかけてやったんだからね。ついたてで、風にあたらないようにしてやったんだからね。ケムシを——二つ、三つはチョウになるように殺さずにおいたけど——殺してやった花なんだからね。不平もきいてやったし、じまん話もきいてやったし、だまっているならいるで、時には、どうしたのだろうと、聞き耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになったバラなんだからね。》〔2/96〕(傍点引用者)

後半部分は、王子の一輪のバラが何千ものバラよりも大切である理由を、「というのも *puisque*」と「強調構文 *c'est elle que*」の反復によって列挙している箇所であり、王子の感情が徐々に高まって、「*Puisque c'est ma rose.*」

で頂点に達していることがわかる。原文も引用しておこう。

《Bien sûr, ma rose à moi, un passant ordinaire croirait qu'elle vous ressemble. Mais à elle seule elle est plus importante que vous toutes, puisque c'est elle que j'ai arrosée. Puisque c'est elle que j'ai abritée par le paravent. Puisque c'est elle dont j'ai tué les chenilles(sauf les deux ou trois pour les papillons). Puisque c'est elle que j'ai écoutée se plaindre, ou se vanter, ou même quelquefois se taire. Puisque c'est ma rose.》[0/474] (c'est moi qui souligne)

内藤訳で「ぼくのものになったバラ」と訳されている箇所は「ぼくのバラ ma rose」である。「ぼくの ma」はいわゆる所有形容詞であるが、所有だけを意味するわけではない。所有以外に、3.1.で検討した動作性名詞の主格ないし目的格を示す場合、習慣的關係を示す場合 (Il a encore sa migraine. 彼はまたいつもの頭痛を起こしている。)、そして関心の対象を示す場合 (Notre jeune homme est tres timide. 私たちが話題にしている若者はとても気が小さいのです。) などがある〔プチ・ロワイヤル仏和辞典 (小学館・1996)・906頁〕。「ぼくのバラ」はこの場合いかなる意味を示しているのだろうか。ここでも決め手は文脈以外にはありえない。なぜ王子の一輪のバラが何千ものバラよりも大切なのか、それは王子とバラの間にはつながりがあるからにほかならない。水をやったこと、ケムシをとってやったこと、不平をきいてやったこと、そのひとつひとつが、「飼いならす=つながりをつくる」ことである。以上のことを踏まえれば、「ぼくのバラ」とは「ぼくとつながりのあるバラ」という意味以上でも以下でもないことが理解できるはずである。

「apprivoiser=じぶんのものにする」という内藤訳が生まれた理由を推論して、その根拠となったと思われる一節を検討したが、それ自体も誤解に基づく誤訳と判定せざるをえない。さらにこの誤解と誤訳の理由を推測することがゆるされるなら、「(男が) 愛するとは (女を) 所有することだ」ある

いは「(男が) 愛するとは (女を) じぶんのものにすることだ」式の古色蒼然たる偏見が根強く存在していたことをやはり考え合わせなくてはならないだろう。一般的に言って、誤訳の最大の原因は知らず識らずのうちにわれわれの頭の中に根を張った偏見を通して読んでしまうことである。

この作品が、既に述べたように、王子が愛することを学ぶに至る成長過程を描く Bildungsroman の一種であるとする、王子がバラの花を所有していると思っていた段階（この段階において、バラの花がありふれた「唯のひとつ」のバラの花でしかないことを認識したことが、王子自身の自己認識のうえでの危機を引き起こしたのであった）の愛から、王子とバラの花のつながりという面からとらえられるようになった段階（この段階でふたたび世界で「唯一つ」の関係が復元されるのである）の愛への転換が、王子の成長の核心である。『星の王子さま』を書き終えたサン＝テグジュペリが死に至るまで書きためていた遺稿『城砦』の表現を使えば、前者の愛は「所有の熱狂 le delire de la possession」であり、後者こそ愛と呼ばれるべきものである。

《愛と所有の熱狂を混同してはならない。後者は最悪の苦悩をもたらすものだ。というのも、世間の意見とは異なって、愛は苦悩をもたらすものではないからだ。しかし所有の本能は苦悩をもたらすもので、愛とは反対のものだ。(……) 真の愛はお前が見返りに何も期待しないところから始まるのだ。》〔0/647〕

3.5. 価値と代償

次の例はやはり語義の多義性を文脈によって規定し得なかったことによる誤訳であると思われる。王子はキツネを飼いならすことに同意し、飼いならすには時間がかかるというキツネの教えにしたがって、翌日また同じ場所にやってくる場面である。内藤訳を引用して検討してみよう。

《あくる日、王子さまは、またやってきました。すると、キツネがいいま

した。「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ。あんたが午後四時にやってくるとすると、おれ、三時には、もう、うれしくなりだすというものだ。そして、時刻がたつにつれて、おれはうれしくなるだろう。四時には、もう、おちおちしていられなくなって、おれは、幸福のありがたさを身にしみて思う。だけど、もし、あんたが、いつでもかまわずやってくるんだと、いつ、あんたを待つ気もちになっていいのか、てんでわかりっこないからなあ……」》〔2/95〕

この訳文のどこがおかしいかおわかりであろうか？ 友人であれ、恋人であれ、だれか大切な相手と四時に会う約束をした場合、三時にはうれしくなりはじめ、四時に近づくにつれて、その気持ちは高まっていくはずである。四時になったら、どうなるか？ 問題点は《四時には、もう、おちおちしていられなくなって、おれは、幸福のありがたさを身にしみて思う。》の箇所である。以下にフランス語原文を先頭に訳文を列举してみよう。

0) A quatre heures, déjà, je m'agiterai et je m'inquiéterai; je découvrirai le prix du bonheur! 〔0/472〕

1) At four o'clock I shall already be worrying and jumping about. I shall show you how happy I am ! 〔1/84〕

2) 「四時には、もう、おちおちしていられなくなって、おれは、幸福のありがたさを身にしみて思う。」

3) By four I'll be all excited and worried; I'll discover what it costs to be happy ! 〔3/61〕

4) 네 시가 되면 이미 나는 불안해지고 안절부절못하게 될 거야. 난 행복의 대가가 무엇인지 알게 될 거야! (四時になるとすでに不安になり、そわそわすることになるだろう。幸福の代価がなんであるかを知ることになるだろう!) 〔4/162〕

5) 「四時になったら、もう気もそぞろだよ。幸福っていうのがどんなことかわかる!」 〔5/100〕

- 6)「四時にはもう、わくわくして、気が気じゃない。しあわせのありがたさがわかるってわけさ！〔6/116〕
- 7)「そうしてとうとう四時になると、もう、そわそわしたり、ドキドキしたり。こうして、幸福の味を知るんだよ！」〔7/105〕
- 8)「四時には、もうそわそわして、気が気でなくなる。こうしてぼくは幸せの価値を見いだすっていうわけだ。」〔8/110〕
- 9)「四時になろうものなら、ぼくはもうそわそわして、わくわくする。自分は幸せなんだなあ、とぼくは心底思うことだろうよ。」〔9(5月号)/95〕
- 10)「四時にはすっかり昂奮して落ち着かなくなる。幸せにはそれなりの代償もあるということに気がつくだろう。」〔10/108〕

問題は *le prix du bonheur* の *prix* が、値段・料金という具体的な意義以外に、価値と代償という二つの意義をもっていることである。3) Richard Howard 訳と 4) 최복현 訳と 10) 倉橋由美子訳だけが、*le prix du bonheur* を「幸福の代償・代価」と解釈しており、それ以外はすべて、「幸福の価値」のバリエーションと見なすことができる。この二つの意味のうちどちらが適切かは、「A quatre heures, déjà, je m'agiterai et je m'inquiéterai; 四時になると、もう、じっとしていられなくなり、心配になるだろう。」の部分素直に読むだけで明白である。それにもかかわらず、日本語訳では倉橋訳を除いてこれが誤訳された原因は、おそらく、「四時に会う約束をしていて三時頃からだんだん嬉しい気持ちが高まって四時にはピークに達するはずだ」という思いこみであろう。だから、「A quatre heures, déjà, je m'agiterai et je m'inquiéterai; 四時になると、もう、じっとしていられなくなり、心配になるだろう。」この文がそれまでの気持ち（うれしさ）と相反する気持ち（心配）を記述していることを無視して、この部分を「おちおちしていられない」、「気もそぞろ」、「気が気じゃない」、「ドキドキする」などの的はずれな訳をせざるをえなくなっているのである。日本語訳では倉橋訳がもっともすぐれているが、「je m'agiterai et je m'inquiéterai」の

訳「すっかり昂奮して落ち着かなくなる」はすこし改善の余地がある。次の訳文を提案しておきたい。「四時になるともう、私は心配でじっとしていらなくなり、幸せにはそれなりの代償もあるということを発見することになるだろう！」

4. おわりに

第21章の最後の場面は、狐が王子に秘密を贈り物にするところである。この秘密とは何だろうか。

《「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」「かんじんなことは、目には見えない」と王子さまは、忘れないようにくりかえしました。「あんたが、あんたのバラの花をととてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ。」「ぼくが、ぼくのバラの花を、ととてもたいせつに思ってるのは……」と王子さまは、忘れないようにいいました。「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。めんどうをみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね……」とキツネはいいました。「ぼくは、あのバラの花との約束をまもらなけりゃいけない……」と、王子さまは、忘れないようにくりかえしました。》 [2/99]

まず点線部「あんたが、あんたのバラの花をととてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ。」について、原文「C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante.」 [0/475] における perdre le temps は「ひまつぶしをする tuer le temps」ではなく「時間を費やす」あるいは文字通り「時間を失う」の意味で解釈すべきであり、「あんたが、あんたのバラの花をととてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、あんたが費やした時間のた

めだよ。」と訳すべきであろう。波線部「めんどうをみたあいてにはいつまでも責任があるんだ」について、原文は「Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé.」[0/476]であるから、「あんたはあんたが飼いならしたものにいつまでも責任があるんだ」と、鍵になる表現はそのまま直訳すべきであろう。そして、下線部「まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね……」に対応するのは、「Tu es responsable de ta rose...あんたはあんたのバラに責任があるんだよ」であるから、下線部はまったくの意識である。しかし「責任がある」ということと「約束を守る」ということは、言うまでもなく、一致しないのであるから、しかも、王子はバラの花と何の約束もしていないのであるから、この意識には疑問を感じる。

最後に指摘しておきたいのは、傍点部「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。」についてである。原文にもう少し忠実に訳すなら、次のようになるだろう。「Les hommes ont oublié cette vérité. Mais tu ne dois pas l'oublier. 人間たちはこの真実を忘れてしまったけれど、あんたはこの真実を忘れてはいけない。」[0/476] cette vérité を「このたいせつなこと」と訳そうが、「この真実」と訳そうが、大差なさそうに見えるかもしれない。しかし、実は、両者には微妙な、しかし重要な差異があるように思われる。内藤訳の場合、「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。めんどうをみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね……」において、「このたいせつなこと」は後続する「めんどうをみたあいてには、いつまでも責任があるんだ」ということをもっぱら指しているように思われる。それに対して、「この真実」と訳した場合には、「この真実」は狐が王子に教える「秘密」と同じものであり、「かんじんなものは目に見えないこと」、「バラが王子にとって大切なのはバラのために費やした時間のせいであること」、そして「飼いな

責任がうまれること」、これらはそれぞれ、目に見えないつながりの現在における大切さと、つながりを作るためには時間が必要であったという過去の事実と、つながりのできたものにたいする未来の責任について語っているものと解釈することができるのである。つながりの大切さという同じ事を、現在・過去・未来に即して述べているという解釈の方が、第21章全体の締めくくりとしてはるかにふさわしいように思われる。

引用文献 (引用は〔文献番号/頁〕として示した。)

- | | | | | |
|-----|------------------|-------------------|--------------------|-----------------------------|
| 0) | フランス語版 | Le Petit Prince | Saint-Exupéry | Gallimard (1943)/(1945) |
| | | | | 引用は La Pléiade (1959) 版による。 |
| 1) | 英訳版 | The Little Prince | by Katherine Woods | Harcourt (1943) |
| 2) | 日本語訳 | 星の王子様 | 内藤濯訳 | 岩波書店 (1953) |
| 3) | 新英訳版 | The Little Prince | by Richard Howard | Harcourt (2000) |
| 4) | 韓国語訳 | 어린왕자 | 최벽현 옮김 | 책이있는마을 (2002) |
| 5) | 新日本語訳 | 星の王子さま | 池沢夏樹訳 | 集英社文庫 (2005) |
| 6) | | | 石井洋二郎訳 | ちくま文庫 (2005) |
| 7) | | | 河野真理子訳 | 新潮社文庫 (2005) |
| 8) | | | 小島俊明訳 | 中公文庫 (2006) |
| 9) | NHKラジオフランス語講座応用編 | | 稲垣直樹 | 日本放送出版協会 4・5・6月号 (2006) |
| 10) | | | 倉橋由美子訳 | 宝島社 (2005) |